



Vol. 1  
July, 2004

文化・芸術研究センター  
ニュースレター

CONTENTS

- 文化・芸術研究センターの活動の更なる充実に向けて
- 主要な研究・事業の紹介
- インフォメーション、その他

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター  
静岡県浜松市野口町1794-1 〒430-8533  
●Tel: 053-457-6113 ●Fax: 053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

A r t & C u l t u r e



静岡文化芸術大学 学長  
文化・芸術研究センター長 木村尚三郎

Shosaburo Kimura

静岡文化芸術大学は開学から5年目を迎え、初めての卒業生を送り出しました。この4月からは大学院も開設し、いよいよ名実ともに一人前の大学として、研究、教育そして地域貢献という、21世紀社会を背負って立つ活動に本格的に取り組んでいきたいと考えています。

文化・芸術研究センターの設立目的は、「両学部連携のもと、文化芸術に関する専門的研究成果を広く学内外に発信するとともに、国際社会や地域社会との幅広い交流及び連携を図る」ことにあります。この4年間にも、文化芸術セミナーを開催し、学長の講演や教員による本学の教育・研究成果の情報発信を行うほか、学内教員によるプロジェクトへの支援、展示や自己表現の場であるセンターホール、ギャラリーの運営・管理、さらには地域社会からの受託研究の窓口として、研究・交流の拠点となるべく努力してまいりました。しかし、開学間もないことから、その存在についての認知度は決して高いとは言えない状況にありました。

静岡県・浜松市・地元の産業界が協力して運営する開かれた大学として、本学は教育・研究への取り組みだけでなく、その成果を社会へ還元し、情報発信していくことを使命としています。そのためには、現在大学が行っている事業や研究活動を見直し、文化・芸術研究センターが研究・交流の中心となり、本学ならではの研究・交流の柱を確立しながら、中・長期的な目標として次のような事業展開に取り組んでいくことが必要と思います。

# 文化芸術研究センターの活動の更なる充実に向けて

## 1. 研究拠点形成をめざして:全国的視野にたった研究の発信と交流の拠点

- 特色ある研究の蓄積と研究者の交流の場作り
- 文献資料などの収集・データベース化と公開
- ニュースレターの発行や研究成果による出版

## 2. 開かれたアカデミズム:産学官交流と地域社会の活性化への貢献

- 地域の産業・文化発展への貢献(受託研究、共同研究、地域文化事業の開催、ワークショップ等の支援・共催、地域社会のデザイン開発など)
- 文化芸術セミナー、公開講座の開催やNPOスタッフの研修など地域に貢献するエクステンションセンター機能

## 3. 研究成果の大学教育への還元

- 学生の卒論、卒業イベント、卒業制作への波及
- 特別講座(大学院など)、寄付講座など

これらを実現していくためには、学内外の人、金、情報といった活動資源のネットワーク化を進めていく必要があります。これからの文化・芸術研究センターの発展に向け、皆さまのご参加・ご協力をお願いする次第です。



# ユニバーサルデザイン研究推進の 拠点設立をめざして

当大学の建学理念の1つであるユニバーサルデザインを研究・実践するためにどのようにするのがいいだろうか。より有効な手法を検討するために、米国と英国の専門家を招へいて情報交換を行うとともに、ユニバーサルデザイン公開講演会を1月15日(木)午後で開催した。

米国からは、ニューヨーク州立大学バッファロー校教授でIDEAセンター所長でもあるエドワード・スタインフェルド教授を、また英国からは王立芸術大学大学院ヘレン・ハムリン研究センター所長のロジャー・コールマン教授を、それぞれ招いた。スタインフェルド教授は、ユニバーサルデザインの父と言われる故ロン・メイス教授らとともに「ユニバーサルデザインの7原則」の作成に携わった一人であり、ユニバーサルデザインの基盤を構成するアクセシビリティ標準の定量的データ研究に関して第一人者である。一方コールマン教授は、ヨーロッパにおいて利用者中心のデザイン(英国ではインクルーシブデザインと表現されることが一般的である)を推進してきた業績でロン・メイス記念21デザイン賞を受賞している。

両教授が所長を務めている組織はいずれも大学に設置されたユニバーサルデザインの研究センターであり、それぞれのデザイン実践を含むこれまでの豊富な経験を踏まえた講演会となった。またそれに加えて、わが国がイニシャテ



ブを取ってきたアジア太平洋障害者の10年を国連ESCAPで中心となって推進してきた琉球大学高嶺豊教授にも、途上国における状況に関しての報告をお願いした。

一方、研究拠点としての機能をわが国の仕組みに合わせ達成する方策については、予算制度などが異なるために米英で行われているやり方をそのまま踏襲することはできないが、学が官民と協力するのは、ユニバーサルデザインという実践的な研究分野の性格から必須と判断され、委託研究に対しても学際的検討を通じて総合的な成果を提示できる能力を活用すべきであろう。

古瀬 敏 (デザイン学部空間造形学科教授)

1

## 2003/2004文化・芸術研究センター 主要な研究・事業の紹介

A r t &

浜松市には、ブラジル人約1万3000人をはじめ、多数の外国人市民が暮らしている。しかしこれらの外国人と日本人との交流、特に文化的なそれは、サンバ大会等を除いてはまだほとんどないという状況である。

歴史的に見ると、文化は異文化との交流によって刺激され、新たな展開を遂げてきた。わが国の奈良時代天平文化や、安土桃山時代の南蛮文化はその典型といえる。

こうした観点から、「多文化社会と芸術」プロジェクトでは3年間にわたって、多文化化が進む地域社会の中で芸術文化が果たす役割を検証することを目的に、

ブラジル人たちと実際に芸術活動における交流や協働(コラボレーション)を図る試みを行ってきた。初年度(平成13年)は「路上演劇祭 in 浜松」(主催:路上演劇祭 JAPAN 実行委員会、浜松 NPO ネットワーク



センター)に協力、その中でブラジル人の子供たちを対象にした演劇ワークショップや浜松にあるブラジル人たちの劇団活動取材・記録するとともに、メキシコにおける路上演劇プログラムのリーダーであるギジェルモ・ディアス氏などへのインタビューや、公開シンポジウムにおける活動報告と討議をコーディネートした。次年度(平成14年)では、イタリアと日本で活躍するイラン人現代美術家ホセイン・ゴルバ氏を招き、氏が各地で実施している多文化共生プロジェクト「子どもの足跡」を、浜松に住む日本人とブラジル人の子どもたちとともに実施し、それらを踏まえ、芸術活動を通じた地域社会における異文化の共生のあり方について検討すべく公開フォーラムを開催した。3年目(平成15年)は、アフリカ系ブラジル人の民族宗教の舞踊音楽であるカンドンプレのグループが来日したのを機会に、浜松在住のブラジル人と共催して、カンドンプレの公演と、ブラジル人と当大学の学生と共同で創作ダンスの制作・公演を実施することで、文化事業の企画実施面での協働を試みた。

これら3年にわたる当研究事業は、浜松の地域に一定の在住外国人と日本人の文化交流・協働の促進をもたらしたが、しかしながら芸術文化活動の地域社会へ及ぼす影響力は、単に一過性のイベントによって可能となるものではない。今後は、これらの活動の成果を踏まえ、異文化をつなぐものとしての芸術の意義を明らかにするとともに、外国人市民という「文化資源」を軸にした浜松市の文化政策のあり方を提起していく予定である。

## 3 多文化社会と芸術 在住ブラジル人との文化交流事業

伊藤裕夫 (文化政策学部芸術文化学科教授)

**はままつ「風」プロジェクト** 小型風力発電を応用したデザイン開発

2

伊坂正人 (デザイン学部生産造形学科教授)

浜松は気温の日・年較差のあまり大きくない温暖な地域である。しかし冬季には、体感温度を下げるから風(季節風)が吹くという特徴を持った地域でもある。この風を背景に江戸時代より続く風合戦の祭り文化や榎の木で高い生垣をつくり屋敷森とするなどの風を治める防風林の歴史をもっている。また日本三大砂丘のひとつである中田島砂丘の風紋という、からっ風がくりだした自然の造形も観光資源となっている。

この風をテーマに、「道具」「空間」「情報」の3つの側面から、地域の産業などと連携しながらデザインの研究開発を行う「はままつ「風」プロジェクト」を起こした。その一環として道具開発の領域で、浜松でシステム設計、電子機器製造等を行っている株式会社システックの協力を得て、小型風力発電システムの生活に身近な領域への応用デザイン開発を行った。

風力発電は太陽光発電などとともに新エネルギーのなかで、近年注目されているエネルギーである。一般に風力発電は、スケールメリットを活かすため大規模導入の方向にあり、設置場所が限定され同じ自然エネルギーの太陽光発電に比べ生活への近接感がないという課題をもっている。



そこでプロジェクトでは、小型風力発電による微弱電力を使ったラジオ、警告灯、庭園灯、街路灯など生活に身近な領域へのデザイン開発を行った。小型風力発電機は、浜松のベンチャー企業である株式会社システックが開発したプロペラの直径20cm、出力約0.5w(風速4m/sec.)というミニサイズのものである。さらにプロペラの直径を30cmにし出力を1w(風速4m/sec.)としたものを、金管楽器の金属しぼり技術やピアノの木工技術など地場の技術を再発掘しながらLEDを使った屋外照明器具のデザイン研究開発に展開した。

これらの道具は公共のものも含めて生活の身近な領域に存在する物である。こうした道具を通して、風という自然エネルギーを実感することができ、風力発電に対する理解を深めることができる。またこうした研究開発をふまえて、地域の中に実体化することで、自然エネルギーとしての風力発電を生活に身近なものにすることができるとともに、浜松地域を改めて「風文化」という視点からアイデンティファイすることもできる。

C u | t u r e

4

長嶋洋一 (デザイン学部技術造形学科助教授)

メディアアートフェスティバル

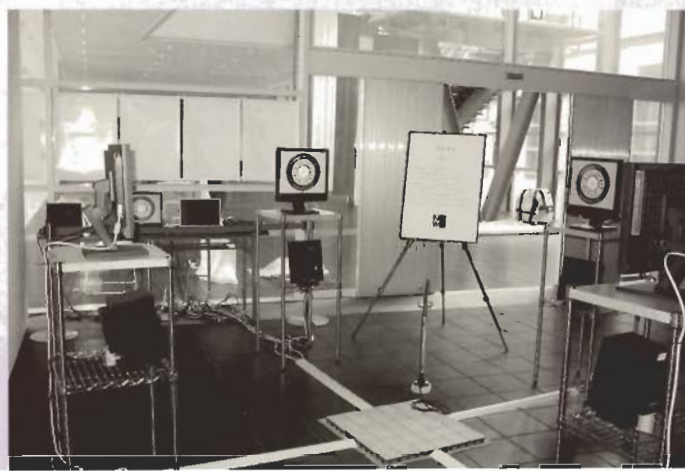
メディアアートフェスティバル(MAF)は、2001年8月、2002年8月、2003年12月、2004年6月、とここ4年連続して開催したイベントで、国内外でも、メディアアート作品の集う機会として注目されるようになってきたものである。具体的には、コンピュータ音楽ライブコンサート、インスタレーション・ギャラリー、映像作品シアター、CG/Photoギャラリーなどのメディアアートの展示会・公演会であり、ここに毎年、関連イベントとして学外の専門家の集う機会を合体させている。

2001年には情報処理学会音楽情報科学研究会夏のシンポジウムを、2002年にはDSPサマースクール(IAMASが母体となった内外の専門家によるワークショップ)を、2003年には国内十数大学の学生作品を集めたインターカレッジコンサートを、そして2004年には本学で初めての国際会議NIME04(音楽/芸術表現のための新インターフェイス)を併催、という形態をとった。新幹線浜松駅から徒歩圏内という本学の絶好の立地を生かして、内外の多くの専門家・芸術家・研究者がMAFの機会に本学を訪れ、互いに、また本学や静岡大学などの関係者とも交流した。

学長特別研究としてメディアアートをテーマにしたのは、デザイン学部の対象領域であるマルチメディア・アートやインタラクティブ・アート、さらに芸術文化学科の領域であるパフォーマンスやイベントプロデュースの絶好の機会として教育的に意義があること、そして単なるイベントだけでなく、日本の中心である浜松の

本学を、メディアアートに関する拠点として活用して、情報収集・情報交換・情報発信のコアハブとなっていく、という構想を掲げたことである。学長特別研究としても、最初の2年間はイベントそのものをターゲットとしたが、ここ2年はイベントだけでなく、「メディアアートの研究拠点化」という目的に重点を置きつつある。

現在進行形のプロジェクトであるが、2004年6月に開催されたMAF2004と併催の国際会議NIME04は成功のうちに終了し、さらに将来への発展のために、このドキュメントのアーカイブ化に取り組んでいるところである。



## 文化芸術セミナーの記録 平成14年度以降

| 年度 | 実施内容・テーマ等  | 開催地                     | 参加者数 |
|----|--|-------------------------|------|
| 14 | 第8回 平成14年12月14日(土)<br>講演「ロボットの心」 (松原季男 教授)   | 静岡文化芸術大学<br>279中講義室     | 62人  |
|    | 第9回 平成15年2月20日(木)<br>「災害対策情報をデザインする」<br>・研究発表<br>「ユニバーサルデザインからみた、防災のための文字・視覚情報の表現」 (野中寿晴 教授)<br>・パネルディスカッション「ユニバーサルデザインからみた、防災のための文字・視覚情報の表現」<br>パネリスト：川端信正氏 (SRI防災情報研究所客員研究員) 外3名<br>コーディネーター：上野征洋 教授 | 静岡文化芸術大学<br>280中講義室     | 32人  |
|    | 第10回 平成15年2月26日(水)<br>・講演Ⅰ「ふり返れば、未来-幸せの物指しが変わる-」 (木村尚三郎 学長)<br>・講演Ⅱ「中国の躍進と日本企業の対中ビジネスチャンス-中国の活力をどう生かすか-」 (馬成三 教授)  | 沼津市<br>沼津東急ホテル          | 145人 |
| 15 | 第11回 平成15年11月29日(土)<br>「風のデザイン」<br>・フォーラム<br>・講演Ⅰ「風文化とデザイン」 (伊坂正人 教授)<br>・講演Ⅱ「風のかたち-屋外照明器具デザイン」 (高梨廣孝 教授)<br>・座談会(「風」プロジェクトメンバー)<br>・展覧会(小型風力発電を使ったデザイン作品)   | 静岡文化芸術大学<br>279中講義室     | 23人  |
|    | 第12回 平成16年2月4日(水)<br>「21世紀に暮らす私たちのために」<br>・講演Ⅰ「動の文化論 ~住んでよし、訪れてよしの町づくり~」 (木村尚三郎 学長)<br>・講演Ⅱ「もの作りは人作り~ロボットコンテストの教育的意義~」 (森政弘 客員教授)  | 静岡市清水文化<br>センター<br>中ホール | 130人 |
|    | 第13回 平成16年2月21日(土)<br>「多文化社会と文化・芸術」<br>・アフロブラジル・ダンス公演 出演 ALAFIA<br>・パネルディスカッション<br>パネリスト：吉村マルセロ氏(浜松ブラジル協会副会長) 外4名<br>司会進行：伊藤裕夫 教授<br>・多文化交流事業の記録ビデオ上映  | 静岡文化芸術大学<br>講堂          | 44人  |

## 平成16年度の事業計画

### 文化・芸術研究センター研究プロジェクト

1. 「メディアアート戦略拠点化のための活動研究」  
(デザイン学部技術造形学科長嶋助教授他4名)
2. 「文化・芸術分野におけるワークショップに関する実践的研究」  
(文化政策学部芸術文化学科伊藤教授他3名)
3. 「ユニバーサルデザインの推進手法に関する研究」  
(デザイン学部空間造形学科古瀬教授他4名)

### 文化芸術セミナー

- ・「メディアアートフェスティバル公開レクチャーコンサート」(6月6日実施、大学講堂)
- ・「オペラ・ブッフアにおける演劇と音楽」(9月4日予定、大学講堂)
- その他学外にて1~2本実施予定

### その他

- ・第4回静岡文化芸術大学「薪能」(10月5~7日予定、大学出合いの広場)
- ・「ニュースレター 文化と芸術」の発行(年2回)

### 編集後記

この2年間、文化・芸術研究センター運営専門部会では、このセンターを名実あるものにするべく事業や組織のあり方について議論を重ねてきて、この度ようやくニュースレターの発行にまでこぎ着けました。本号はいわばパンフレット代わりのような内容ですが、2号以降は内容も充実し、教員の研究や地域活動なども紹介していきたい思います。皆様方のご協力をお願いします。(1)

Art & Culture

# 文化と芸術

文化・芸術研究センター  
ニュースレター

Vol.1  
July, 2004

発行人：木村尚三郎  
編集人：伊藤 裕夫  
発行：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター  
(事務局 静岡文化芸術大学 企画室)